

〔普及の現場から〕

チャレンジ

～電牧利用した放牧の開始とセンチピートグラスの活用～

美作県民局 農畜産物生産課 畜産第二班(真庭支局駐在)

1 はじめに

厳しい畜産経営の情勢が続く中であって、自給粗飼料生産の向上が求められています。

そこで今回は、高梁管内における放牧を中心とした自給飼料生産の取組を紹介します。

2 地域の概要

高梁地域は岡山県の中西部に位置し、高梁川が中央部を南北に流れ、その両側に高原地帯が広がっている中山間地域です。養鶏、養豚、酪農、肉用牛等の畜産経営と共に高品質な夏秋トマトや県下最大のピオーネ産地でもあります。

3 遊休農地放牧で和牛飼育開始

高梁地域は、地域の概要でも紹介しましたとおり中山間地域です。高齢化等により遊休農地が増加する傾向にあります。

労働力の不足するなかで電牧を活用した簡易な放牧がだんだんと増えてきています。

今年度、3件で放牧を開始し、2件が放牧場を拡大しました。(普及センター調べ)

そのなかで今年度、農地管理を目的に、和牛飼育を開始すると同時に、放牧も開始した事例を紹介します。

和牛飼養・放牧同時開始農家の和牛放牧の手順としては、春先に先進農家や総合畜産センターへ行き、飼養管理や放牧現場の実際を視察・研修し近隣の農家等にもアドバイスを受けました。

その後、集落に放牧農家がないため、周辺住民のコンセンサスを得て、JAの協力により10月に和牛を導入に至りました。



導入時には、市内の放牧実施農家で放牧馴致をお願いして、11月の初旬に和牛の飼養と放牧の(1頭)同時開始にした。今後、もう1頭導入し2頭で放牧する予定です。

放牧場設置の当日には、関係機関や近隣農家の方も訪れ、電牧の設置作業を行いました。

放牧牛導入後、徐々に放牧場に慣らしながら放牧地域を広げています。放牧開始直後は、平地の牧草や野草を食べていましたが、現在は植林された傾斜地の下草を採食しています。



(写真：放牧地に慣れた牛、植林の下草を採食)

放牧を開始したばかりの事例ですが、飼育農家の熱意と集落の理解や関係機関のバックアップがあれば、中山間地域では和牛繁殖牛の飼育や放牧がスムーズに開始できると推察されました。また新たに、放牧に興味を持った農家が近隣に出てきており、さらに広がる気配が感じます。



(写真：左/半分放牧前 右/放牧2週間後)

4 放牧場の草地管理（センチピートグラスの活用）

放牧場の電牧化が拡大する中で、放牧場の草丈（漏電防止）や夏場の草量の確保が問題となっています。そこで本年、高梁市大池山育成牧場や県民局畜産班と協力して、センチピートグラスの種子は高価なので、育苗してマット苗とし、定植での活用を試みました。



(写真：センチピートグラス育苗状況 6月下旬)

マット苗の作成には、田植え後のイネの育苗箱（58cm×28cm×3cm：100枚）を使用し、播種土壌としてマサ土を使用し低コストに努めた。

ペットボトル500mlのフタに4mmの穴を2つ開けた播種器で2g/育苗箱へ播種し、踏圧でしっかりと鎮圧した。

育苗開始時期が、遅く6月上旬に播種したため、定植直前まで、乾燥防止や灌水の省力化のため不織布をベタがけにして、毎朝1回灌水におこなった。しかしながら1/3が枯死して定植用の苗として使用不能となった。

（定植遅れと本年降水量が平年以下の影響があると推察される）



(写真：左/定植直後 右/4ヶ月後11月上旬)

苗は7月中旬に定植した。牛が苗を踏んだり引き抜いたりされないように約半分を約2ヶ月電牧で囲い、定着を図った。その結果、11月上旬は、牛に踏みつけられたり採食されて、放牧地の土壌が露出している場所でも、草丈の低いセンチピートグラス定着が確認できました。

マット苗の育苗は容易です。（播種時の鎮圧と水切れに注意必要）またマット苗は大きく、放牧場へ定植しても認知しやすく、保護もしやすい。反面、初夏に定植のため傾斜地への運搬や耕起の労力軽減に工夫や機械化や育苗時の灌水の省力化が図ればさらに利用しやすくなると思われます。

（播種量や播種方法などは、高梁農業普及指導センター「既存畦畔におけるムカデシバ（グラウンドカバープランツ）の省力栽培マニュアル」を参考）

来年には綺麗なランナーが放牧場をすくすくと伸びることを期待しています。

5 おわりに

放牧は、自給粗飼料を牛が自分で収穫してくれる省力的な栽培法です。

また牧歌的景観を醸成し、放牧頭数さえコントロールできれば、環境にもやさしい農業です。

現在は、放牧技術も進歩しておりチャレンジしてみたいかたがでしょう。